

知性豊かな社会人を育むことが

日本語検定の使命



石黒 圭 (いしぐろ けい)

1969年（昭和44年）大阪府生まれ。早稲田大学大学院文学研究科日本語日本文化専攻博士後期課程修了。博士（文学）。国立国語研究所 日本語教育研究領域 領域代表・教授、一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授。専門は読解教育・作文教育。2019年4月より、日本語検定委員会審議委員。著書多数。近著に、『豊かな語彙力を鍛える』（ココ出版）、『大人のための言い換え力』（NHK出版新書）などがある。

読んで理解する過程を明らかにすることで 見えてくるもの

「日本語を学習する者が日本語をどのように運用しているのかを解明するために、12言語を話す17か国20地域の人々に日本人を加えた約1000人をモニターにした調査を進めています。対象者の中でも比較的解明しやすいのが、母語が日本語ではない外国人です。読むことについて例を挙げるなら、たとえば、外来語に「ソフト」という言葉がありますね。“コンタクトレンズをソフトに変えた”、とあればソフトコンタクトレンズ。“うちの娘の部活はソフトだ”、の場合はソフトボールまたはソフトテニス。“観光地で子どもがソフトを食べた”、ならばソフトクリームというように、日本人は「ソフト」という言葉が使われた文脈を踏まえて、その意味を認識しています。ところが外国人の場合、文脈によって言葉の意味が異なることは理解しづらいのです。

- そこで、外国人が「ソフト」という言葉を正しく理解する過程を紐解くわけですがその過程は頭の中で起こっています。つまり、目に見えないものですから、文章化する、話してもらい、問題を解く、などさまざまな方法で母国語に翻訳してもらい、読んで理解するまでにどんな日本語の力が運用されているのかを導き出しています。」
- 「読みに多様性が生まれるのは、言葉の粒度、すなわち情報のキメが粗いからなのです。画像が持つ情報量はとても多く、粒度が細かいと言えます。それに比べて言葉は情報量が圧倒的に少なく、粒度が粗い。ところが、言葉は粗いまでも理解できます。これは脳内で、読み手の解釈によって情報のキメの粗さを補っているからでしょう。そうだとすれば、理解の度合いにも個々によって相当な差が出る。だからこそ、言葉を補って思考しながら読む読解力を、もっと重んじる必要があると思っています。」

発信者として見つめれば

日本語力も磨かれる

「もし仮に私の日本語の能力が高いとするならば、発信するためという観点で世の中を見ているからでしょうか。現代はビジネス場面やSNSなど、大多数の人が毎日何かを発信しています。発信するという視点を持つと、物事を注意深く、深く見るクセがつく。自分の知識も自然に蓄積されていくのです。

私は、面白いと思ったことは必ずメモをとるようにしています。最近も面白いと思えた言葉がありました。“陸続きの国”。聞きようによっては“理屈好きの国”ですよね。漢字で書けば明らかに違いますし、ひらがなでも“づ”と“ず”で区別できます。誤読の可能性はありません。ところが、音で聞くと戸惑ってしまう。大したことはありませんが、ちょっと気になったことが新たな発想につながる可能性は大いにあります。

また、他者と対話することも大切です。わからないこと、知りたいことを教えてもらう相手は、コンピューターではなく人が一番です。コンピューターは、わからないことを上手に設定して尋ねなければ必要な情報をくれません。ところが、人には察する力があります。わからないことを、相手のレベルに合わせて教えてくれる。さらに、付随する情報や個人的な見解も加味されます。端的な答えよりも枝葉の情報に価値があることも多いのです。

ある美容室専門の検索サイトを見ると、客の書き込んだお店の口コミに対して、お店側が返事を書き込んでいます。この対話が面白いですね。たとえば、読者に行ってみたいと思わせる美容室は、“いつもありがとうございます”という言葉でさえ少しずつ変えていて、紋切り型の言葉を繰り返さない。手を抜いていると思わせない工夫があります。そのことがお客様の動員に直結すると考えれば、美容師に求められる能力は日本語の能力だと言っても過言ではありません。これはどの仕事にも言えることです。面と向かって対話をしないケースが増えれば増えるほど、より相手の心に響く日本語が求められるのです。」



知性豊かな社会人を育てることが 日本語検定の使命

「日本語検定は検定試験ですから、到達度を測る評価として利用されます。ですから、合格・不合格という結果に目が行きがちです。しかし、試験の結果を単なる評価に終わらせず、受検者が自分の強みと弱みを知ることによって、次こそは弱点を克服して必ず受かるぞという学習のモチベーションを高める役割を果たして欲しいと願っています。

さらに、日本語は時代とともに変わります。「今どのように日本語が使われているか」という実態を踏まえ、「現代社会に必要な日本語力とは何か」という理念をより明確にしていけば、子どもたちだけでなく、幅広い層に求められる日本語検定になっていくのではないのでしょうか。こうした問題は、日本語を使う場面やツールが多様化している今だからこそ、私自身も常に考え続けなければならない問題だと感じています。

日本語力を磨けば、高度な言語運用能力を備えた知的な社会人に育ちます。知性豊かな社会人を育ていくことも日本語検定の大切な使命だと思います。」